

とよなかアーツプロジェクト
メディアアート企画

光さす 間に まに

Before
Light
Reveals

Artist | マスラックス

MATHRAX

久世祥三+坂本茉里子
Shozo Kuze + Mariko Sakamoto

2022.9.24^{Sat.} — 10.16^{Sun.}

豊中市立文化芸術センター

1階 展示室・大ホール、2階 和室、3階 テラス

時間 | 10:00-18:00 (金曜・土曜は20:00まで開場、最終日は12:00に閉場)

観覧料 | 一般800円 (展示室・和室のみ入場の場合は一般 500円)

休館日 | 月曜 (ただし、10/10〔祝・月〕は開館、翌10/11〔火〕は休館)

主催 | 豊中市市民ホール等指定管理者、豊中市

後援 | 豊中市教育委員会

協力 | 茅ヶ崎市美術館、花王株式会社 KAO、美山工房

技術協力 | レイヨンヴェール

感染症対策について

*感染拡大予防ガイドラインに沿って対策を講じ、

ご来場の皆様と関係者の安全と安心を保つ取組みを実施しています。

*ふれる作品には、抗ウイルス・抗菌処理を行っています。

*マスクの着用・手洗いや手指消毒・検温のご協力をお願いします。

*各展示スペースの定員に基づき、入場制限する場合がございます。

とよなかアーツプロジェクト

豊中市立文化芸術センター

ご挨拶

このたび、とよなかアーツプロジェクト メディアアート企画 展覧会「光さす間に」にお越しいただきまして、ありがとうございます。豊中市立文化芸術センターにてご覧いただく本作は、久世祥三と坂本茉里子によるアートユニット MATHRAXの既存の5作品と新作2点を、展覧会コンセプトに沿って作家自身が構成したもので、〈ふれる〉から始まる、インスタレーション作品をご紹介します。

本展初公開となる作品は、かねてより「人の意識の構造」へ関心を寄せる作家が、ここ豊中でのリサーチを経て、現象学と神話に独自の関連性を見だし、根源的な問いを内包する構想を、デジタル技術を用いてクリエーションしたものです。音と光そして造形が、身体の動きに呼応する不定形の空間には、豊かな、あるいはとどめて定義することが困難なバリエーションが漂います。そこで鑑賞の地点から発見されるのは、作品の語りであり、自然摂理であり、わたしの「声」であるかもしれません。

本アーツプロジェクトは、自分の「表現」を見つけること、あるいは隣りの人の「声」にふれること、それが交差することを願っているプログラムです。パンデミックの後に、あからさまに現れた断絶を目の当たりになっている今日、本作の鑑賞「体験」を通し、育まれる思考と実践があることを望みます。最後に本展の開催に当たって、真摯な対話と創造的な機知を共有し続けながら、2点の新作をご発表してくださいましたMATHRAX様、ならびに本展の実現のために貴重なご助言とご協力を賜りました皆様、あらゆるご支援に心より感謝を申し上げます。

展示会の背景と構造

豊中は「音楽あふれる街とよなか」をうたう市である。今回の展示会の企画をして下さった豊中市文化芸術センターは、今後の展開として、音楽・美術・演劇などのジャンルを横断した新しいクリエイションの展開と、誰もが自分自身を容認しながら新たな創造を可能とする場を作りたいと展望していた。そのことをふまえ、私たちはこの美術の展示会に、音楽や演奏にまつわる現象とその構造を取り入れてみたいと考えた。なぜなら音楽は、人の感覚的な時間に寄り添いながら、様々な事象にリンクする性質を持つ。その自由さにも憧れているからだ。

今日、私たちは不安定な世界情勢やパンデミック、自由や主体性を奪われるような出来事に直面し続けており、身体的にも精神的に厳しい状況にある。私たちは、人が音楽の合奏を行う際の意識の構造を現象学的に捉えた精神科医の木村敏氏の書籍『あいだ』（ちくま学芸文庫）の論考をベースに会場を構成することにした。その理由は木村氏が「音楽という行為は、人間のいとなむ他のすべての行為と同様に、人間が生きているということに直接根差した生命活動の一つである。」と述べており、私たちの日常にそのままつながるからである。

木村氏は、人の意識がどのように音楽を志向し、認識し、他者との合奏を可能にするのかを「ノエシス（意識が対象に志向する作用）」「ノエマ（表象）」「あいだ」という概念を用いて考察している。その「あいだ」は、私たちがあからさまに認識できない究極的な次元であるが、私たちが生命として「生きている」という根拠は、まさにその次元とのつながりを保っているからだと述べている。この「認識できない究極的な次元」や「心の動きや言語を絶した世界」については、日本の芸能や哲学の中にも登場する。

あめのいわとしんわ 天岩戸神話

猿楽（のちの能楽）を大成した世阿弥は、「人が〈面白い〉と思うのはなぜか」、日本の神代の古伝承である「天岩戸神話」を引用し、人の意識の構造の面から考察している。

この神話は、太陽の女神である天照大御神が、弟の須佐之男命の暴虐により岩戸に篋り、世界が闇に覆われてしまうなか、八百万の神々が様々な知恵を絞って岩戸の外へ引き出し、世界に光を呼び戻す話である。天照大御神が岩戸を開けると、闇は光によって裂け、神々の顔が白く照らされる。世阿弥によれば「面白い」という言葉はここから来ており、この「闇」「光」「白く照らされた顔」という3つの構造は、それぞれ芸の肝要な要素である「妙（人智の及ばない境地）」「花（変化）」「面白き」に対応していく。この構造は、前出の木村敏氏の「認識できない究極的な次元」「意識が何かに志向する作用」「表象」にも重なり、人の感覚と時間の関係性について垣間見る機会を与えてくれる。



闇

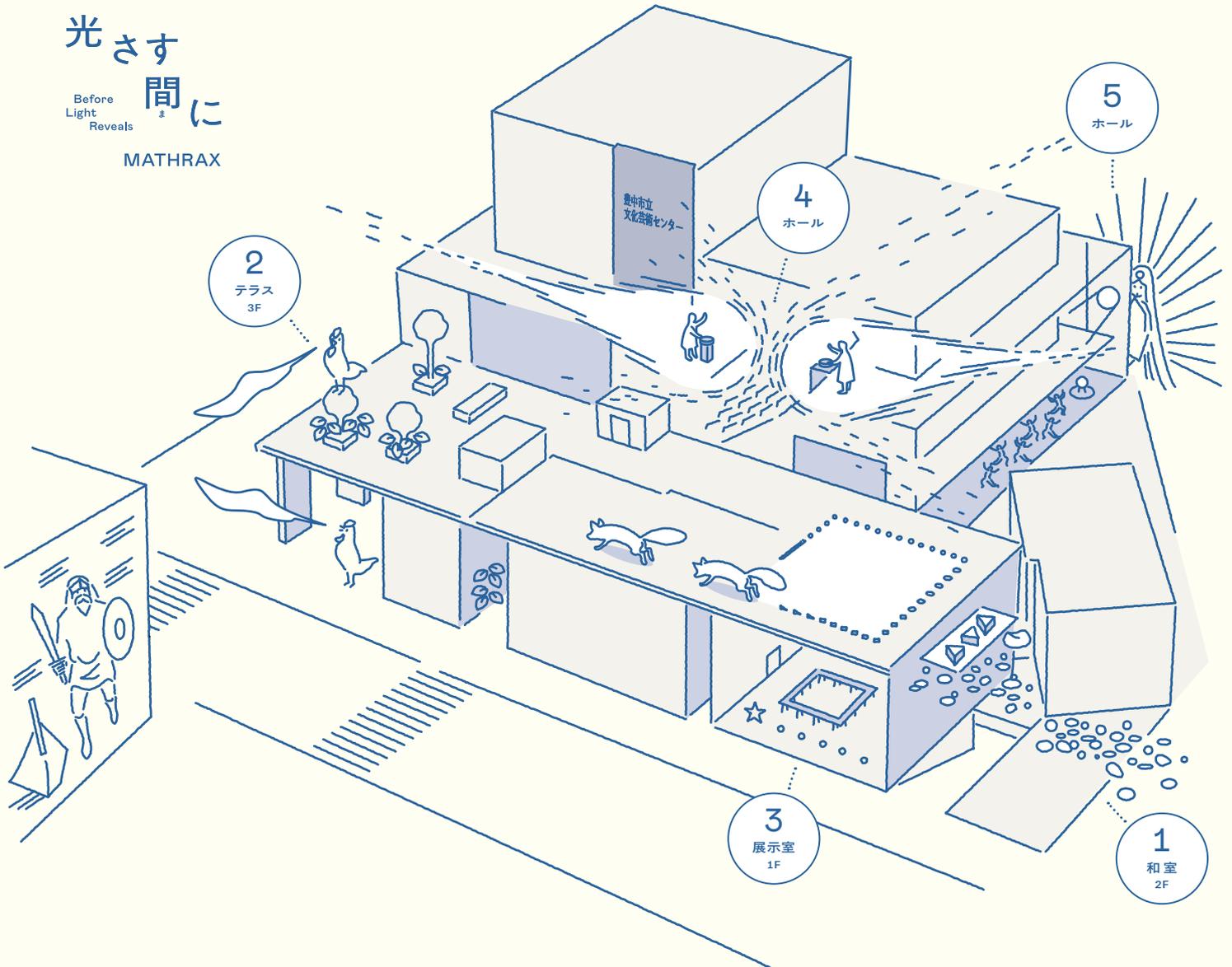
光

白く照らされた顔

今回、私たちは、センターの場所性からも、芸能のはじまりと言われる天岩戸神話をモチーフにしてみることにした。また出展作品には、それぞれに人の意識のはたらきの部分に注目したものをしつらえた。展示会のタイトル「光さす間に」は、人が何かを意識して感じる間やあわいのことを表している。私たちはこの「間」の中でもっと自由に遊んでもいいのかもしれないという思いを込めて。

光さす
間に
Before
Light
Reveals

MATHRAX



1

いしのこえ

Voice of the stone

インスタレーション
2016年石、木、電子部品
協力 | 茅ヶ崎市立西浜中学校、
茅ヶ崎市立松林中学校、
茅ヶ崎市美術館石の
声を
聴く

《いしのこえ》は、とあるネイティブアメリカンの「石の声を聞くスキル」からインスピレーションを受けて制作したものである。彼は荒野でのサバイバルの修行中に命の危険にさらされるが、光る石を見つけ、その石から火を起こす方法を教えてもらう。彼はその教えの通りに石を削り、火打ち石にする。なぜなら身体を温めることこそが彼が生き延びるために必要なことだったからだ。石の声は、わたしと石との間に生まれる。今、石とわたしの間にはどんな声が生まれてくるだろうか。

「いしのこえ」シリーズの作品2点も併せて展示しています。

風と石〈小雪〉Wind and stone [Light snow]

オブジェ／2020年／石（水晶、アメジスト、タイガーアイ、ラブラドライト）／木（シャムガキ、ウォールナット）／電子部品

風と石〈雨水〉Wind and stone [The rains]

オブジェ／2020年／石（ソーダライト、水晶、バイライト）、木（クロガキ、ウォールナット）、電子部品

2

とこよのうたよみ

Poets of the eternal world

インスタレーション
2022年 | 新作木（スギ、ベイスギ、
ウォールナット）、電子部品誰か
に
声
を
か
け
る

とこよ常世とは、古事記や日本書紀の中に登場する異界のことで、永久に変わらない国のことである。あめのいわとしんわ天岩戸神話の中で、神々は岩戸に隠れた天照大御神を呼び戻すために「とこよながまどり常世の長鳴鳥」と呼ばれる鶏を集めて鳴かせたという。鶏は太陽を呼ぶ神聖な鳥とされており、神域への境界となる神社の「鳥居」は、その鶏を留ませたことからそのように言われるという説もある。

この作品では、センターの入口の真上にあたる緑豊かなテラスに鶏たちを配置し、鳥居とした。テラスに出ると突如、目の前に現れるヴァイキングは、海を治めるように命じられた須佐之男命（スサノオノミコト）に見えなくもない。しかし、鶏たちは構わず鳴き、声をかけるだろう。「声」は「越える」が語源ともいわれるが、それはまさに自分を越えて相手にアプローチする働きでもあるだろう。

3

うつしおみ

U tsu shi o mi

インスタレーション
2019年木、電子部品、LED照明、香料
協力 | 茅ヶ崎市美術館、
花王株式会社 感覚科学研究所推
進
力
に
乗
る

《うつしおみ》は、「今この世に生きている人」という意味を持つ。うつしおみとこよ常世と対をなす言葉である。

この作品は、制作のコラボレーターとして、盲導犬ユーザーの小倉慶子氏とそのパートナーである盲導犬のリルハと共に制作したものである。視覚情報のない街を歩くことがどんなに大変なことか、試しにやってみるとすぐに分かるだろう。だが、彼らは本当に楽しそうに歩くのだ。そこにはリズムと推進力が生まれ、彼らは生と死の境界を軽やかに進んでいく。道すがら紡ぎ出していく様々な風景を楽しみながら。

〈香りについて〉

「うつしおみ」の展示には、その時々に合わせて香りを共にしつらえている。今回の香りは、世阿弥が、芸の位の最高位とした「妙花風」を、それぞれ「妙」「花」「風」に分け、花王株式会社 感覚科学研究所の研究員の方に調香いただいた。

風 …… 草原を通り抜ける初秋の爽やかな風

ブチグレン（オレンジの枝）（初秋の風）、ランダー（風に香るハーブ）、ローズマリー（澄み切った空と冷たい空気）

花 …… 人々を魅了する花

テイカスラ（優しさ／天守受売命が頭にかぶった花）、ローズ（華やかさ）

妙 …… 人智を超えたたずまい

オリバナム（乳香）（神聖さ）、セダーウッド（心の静けさ）、パチュリ（鎮魂）

4

ステラノーヴァ

Stella nova

インスタレーション
2015年 -

木、電子部品、LED

出
会
い
交
差
す
る

コロナウイルスによるパンデミックにより、人と会ったり話したり、何かに触れることも敬遠されるようになって3年以上が経つ。制作当時は、まさかこのような状況になるとは思ってもみなかったが、深淵な宇宙空間の中、互いに話したり触れ合うことが叶わない2つの星が、音によってコミュニケーションを取ろうとする様子をイメージして構成した。

ステラノーヴァは「新星」という意味を持つが、実際には、すでに活動を終えた暗い星が、他の星の接近によって明るく輝く現象のことをさす。その様子は、地球からは新しい星が生まれたかのように見えるのだそうだ。この作品における「ステラノーヴァ」は、人が他者との出会いによって新しく生まれ変わっていく時の音の現象のことをさしている。

5

光の依代

The light dwells

インスタレーション
2022年 | 新作

鏡、木、布、電子部品

わ
た
し
に
出
会
う

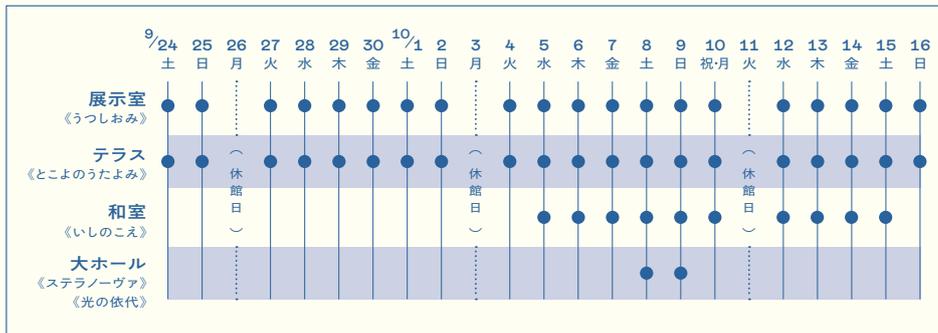
この作品は、天岩戸神話の中で祀られた「鏡」をモチーフに、人が本来の清らかな姿に帰るという「禊」の要素を扱ったものである。また、タイトルの「依代」とは、神霊が依りつく物や人のことをいう。この展示会では、人の意識の志向性を「光さす」様に見立てているが、「光」が依りつく人とは、すなわち、今を生きている者のことである。常闇の世界に光がさす時、またその光を自らに受ける時、それらの「あいだ」には何が起きているのだろうか。

アートユニット MATHRAXについて

MATHRAXは、電気、光、香り、石や木などの自然物を用いたオブジェやインスタレーションの制作を行う久世祥三と坂本菜里子によるアートユニットである。

久世は、大学で油画を専攻していたが、電子回路に目覚め、現象を数値として扱い、プログラムによって自身の世界観を表現してきた。一方、坂本は、グラフィックデザインを学びながら、オーケストラで演奏していた経験から、音楽がどのように人々の間に成立するのか、その現象やしぐみに興味を持って制作を行ってきた。それらは、のちにアートユニット MATHRAXとして、人の意識の構造や、構想力に注目した作品を作るきっかけとなっている。

展示スケジュール



関連イベント

調香体験「わたしの香りをつくろう」

日程 | 9月24日(土) 13:00～、15:30～(各回約1時間) ※開催を延期致しました。

講師 | 花王株式会社 感覚科学研究所

対象 | 小学生以上(小学生3年以下の方は保護者同伴)

電子工作ワークショップ「キツネも歩けば光る・奏でる」

展示作品「うつつしおみ」の中に登場するキツネをモチーフにした電子基板を組み立てます。

キツネは揺れるとしっぽを光らせて音を奏でます。

日時 | 10月2日(日) 10:00～、14:00～(各回約2時間)

講師 | MATHRAX(久世祥三+坂本菜里子)

対象 | 小学生以上(小学生以下の方は保護者同伴)

感受性のワークショップ 赤ちゃんと大人編

プログラムディレクター山城大督による「赤ちゃんと大人の感受性」を育むワークショップです。

日時 | 10月9日(日) 9:30～11:30

対象 | 3歳以下の子どもと大人

目の見えない人と見える人の鑑賞ワークショップ「〈みる〉と〈さわる〉の間で」

見えない人と見える人が集まって、それぞれの〈みる〉と〈さわる〉の経験を共有しながら楽しむ鑑賞会です。

ファシリテーター | 「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」より

日時 | 10月1日(土) 12:00～14:00

対象 | 障害の有無にかかわらず、どなたでも(内容はおとな向け)

アーティスト・トーク [オンライン]

展覧会と作品についてアーティスト本人がオンラインで語ります。

日時 | 10月1日(土) 16:00～

対象 | どなたでも

ギャラリートーク

本展企画担当者が展覧会について解説します。

日時 | 9月27日(火)、10月15日(土) いずれも 14:00～

対象 | どなたでも